

女伏

白秋全集

18

白秋全集 18

第一三回配本(第I期 一〜二四卷)

一九八五年二月五日 発行

定価三五〇〇円

著 者 北 原 白 秋

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番地 發行所 銚 岩 波 書 店

電話 〇三六三二
振替東京六二六四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

『芸術の円光』

考察の秋	その一	五
芸術の円光		六
詩へ		三三
立つ		三七
詩であるか		三九
叙事詩であるか		四三
粗雑なる表現の一例		四四
かやの実		四九
言葉の遊戯か		五五
相手を選ばぬ理由		五八
詩の尊さ		六六
散文が詩といへるか		六六

詩の外道を排す	．．．．．	壹
追記	．．．．．	貳
よいもの拾うた	．．．．．	参
考察の秋 その二	．．．．．	九
民謡私論	．．．．．	一〇
民謡について	．．．．．	一〇三
時代相と民謡	．．．．．	一五
読む民謡とは何か	．．．．．	二四
弄斎について	．．．．．	一〇六
再び民謡について	．．．．．	一七
考察の秋 その三	．．．．．	一八
森鷗外先生	．．．．．	一八
水墨集跋	．．．．．	一八
月に開く窓	．．．．．	一七
真珠抄余滴	．．．．．	一六

v 目 次

父子草母子草	．．．．．	三〇
考察の秋 その六	．．．．．	三五
ある作曲家に	．．．．．	三六
歌詞と作曲	．．．．．	三三
山荘より	．．．．．	三七
鷺ペン その一	．．．．．	三八
鷺ペン その二	．．．．．	四〇
鷺ペン その三	．．．．．	四二
鷺ペン その四	．．．．．	四四
鷺ペン その五	．．．．．	四六
鷺ペン その六	．．．．．	四八
鷺ペン その七	．．．．．	五〇
鷺ペン その八	．．．．．	五二
鷺ペン その九	．．．．．	五五
鷺ペン その十	．．．．．	五八
鷺ペン その十一	．．．．．	六〇

驚ベン	その十二	三六
驚ベン	その十三	三七〇
驚ベン	その十四	三七三
驚ベン	その十五	三七八

山莊主人手記	三五五
--------	-----

山莊主人手記	三八六
--------	-----

芙蓉記	三九三
-----	-----

その日のこと	三九六
--------	-----

胡麻の実	四二三
------	-----

巻末に	四五
-----	----

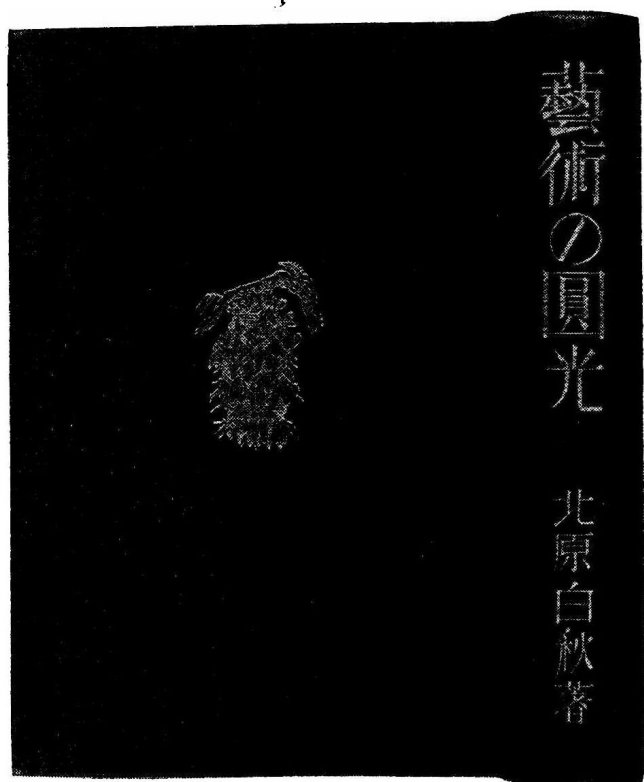
創作目録	四二七
------	-----

装幀・恩地孝四郎

『芸術の円光』増補

〔アルス刊『白秋全集』第一三巻〕

『芸術の円光』



〔表紙〕

〔昭和
2年
3月
15日
アル
ス刊〕

詩 論 集

光圓の術藝

北原白秋 著



ARS

[本扉]

考 察 の 秋

そ
の
一

芸術の円光

主として詩について

一

詩の香氣と品位といふことを私はいつも考へる。これを総じて氣品と云ひ氣韻といふのはそれである。これは巧みて成るものではない。詩人その人のおのづからな香氣と品位とがそのままそれらをその詩に持ち來すのである。

ここに一輪の白薔薇がある。その白薔薇の香氣は既にその葉にも刺にも枝にも幹にもその根にも充満してゐるのである。決してその花にだけ突然あの清高馥郁たる香氣が現はれたのではない。その凡てから押し上げる香氣と品位とが、即ちその白薔薇さながらの氣韻を躍動させるのである。

この充ち満ちてゐる氣韻は一枚の薄の葉にも私たちは見ることを得る。根元より尖端に至る、それは鮮麗な緑の氣韻そのものである。

いかなる細微の、いかなる目につかぬ隅々にまで、その心を潜める事に於て、おのづから我と氣もつか
なかつた深い氣韻の中に我を見出すであらう、あらゆる虔ましさの美德に由つて。

真の、つまり氣韻なるものは、むしろこの人の目にもつかぬ奥所の美德から紛々と高い靈魂の香氣を発
して来るのである。外に現はるはその余香である。薔薇の氣品は一先づその根に於て完備し尽されてゐ
る故からの氣品である、美と均整とに由つて。

私はいつかいかにも端麗なある小さい榮螺の素肌を見た。甲羅の壺から小楊子でほじり出されたその素
肌は、黒と薄青とのそれは透きとほつた大理石の光沢であつた。その誰の目にもつきさうにもない、恐ら
くは蝶螺自身すらも意識しさうにない、その肌の一部には派出な海老茶色の渦巻模様さへ刺青されてあつ
たのである。考へると自然の摂理と云はうか、智慧と云はうか、殆神意とも見るまでに入念に丹精をこめ
たその模様は、否、その神技の由つて来る靈徳は、蝶螺の殻の外までも、否、蝶螺全身の氣品をさへ、そ
の内面から冷えびえと整へさしてゐたのである。

で、蝸牛には蝸牛の、蝸蝓には蝸蝓の特種の形態を透しての、それぞれの生命の氣品がある。いかなる
葉にとまり、いかなる穂草の芒に飛び移つても、その虔ましい氣品は損はれない。露を吸ふものの新鮮さ

と生きものの素朴さとを以て、而も均整された形態の美は、たとへば逆さとんぼうつても、却つてそれは動くものの生きた韻律的美をさへ添加する。

詩の一つ一つの気品も要するに詩人その人の内に深く潜められた虔ましさ、奥ゆかしさ、充ち満ちた靈魂の信実、その底の永生の神格、さういふものが、おのづとその人の気品となつて外に現はれたものである。言葉或は韻律のみから生じたものでは決してない。つまり外から人為的にたやすく粉飾し得べきものではないのである。いかなる妙技を以てしてもその人に無い気品は決して表はせる筈はないのである。その人にある。

これと反対に、不純な、若しくは粗暴な、傲岸にして騒ぎ易く、信義なく誠実なき人から、対境からいかなる気品ある詩も決して生じ得る筈はないのである。恐懼しなければならない。

ここに私の云ふ氣韻といふものを、世の似而非風流者、俗南画家、或は無智な骨董商等の云ふそれと同じに見ることは非常な誤謬を生ずる。また品位といふものを道德的高潔性のみを指したものと見てはいけない。芸術の気品は美の香気の気品である。最上の詩の気品若くは氣韻は世の善惡の上にある。

万有それぞれに一々の香氣と品位とを持つ。一茎のほのかな白芥子の気品を知つて、かの蒼穹の図り知